

現象の意味

1. ヒヨドリの盗蜜

花は蜜を準備し、ミツバチは蜜をいただく代わりに花粉を運ぶ。このような図式が今栄えている被子植物と昆虫との間に成立しています。ところが、この植物と昆虫との契約を履行しない虫がいます。クマバチは袋や筒状になっていて潜り込まなくては蜜を吸うことができない構造になっている花に横から穴を開けて蜜だけを舐めとります。したがって、花粉を体につけないため花粉の運び屋の役目をしません。このような行動を盗蜜と呼んでいます。

ツバキの花が咲くと、集まってくるのはメジロとヒヨドリです。人が舐めても甘さを感じるくらいですから、ツバキは濃い蜜を大量に供給しているのです。虫のいない冬に花粉を運搬してもらおう報酬です。ところが、写真のような開花していないツバキの蕾がたくさん落ちているのです。



食べ破られたツバキの蕾



吸蜜後のサクラの花

しかも枝の付いた状態で、折り取られていま 犯人はヒヨドリで、開花すればくちばしを差し込んで顔に花粉をつけながら吸蜜するのですが、まだ硬い蕾を半分食い破り、蜜を盗んだ後、枝をくちばしで折って落としています。餌が不足しているのでしょうか。

サクラの花でも、スズメやヒヨドリが吸蜜の後、花柄から切り落とすことが観察されます。この行動の意味はわかっていますが、蜜を吸ってしまった花に再度向かわないためという合理的な目的があるのかもしれない。

2. ツバキの生理的落下

ツバキは写真のようにたくさんの花をつけます。6～7月、枝の先端の節間の詰まった葉の葉腋の芽が花芽となって膨らんでいきます。一つではなく複数のものもあります。

若木には花芽がつきませんが、老木で数えてみると約3ヶ月の間に10,000以上の花を咲かせます。花の大きさ、大量の蜜をだすことから考えると相当の物質を消費していると考えられます。さらに、この花のために準備された蕾はこれ以上の数になります。秋になると開花数の約10%が果実にまで成長し、



冬から春にかけて開花



落下した蕾

裂開して種子を落としますが、油を大量に含む種子への資源投資は大きなものです。このため隔年結実が起こるといわれています。



裂開した果実と種子



落下した幼果

蕾になったところで、開花に至らず落下してしまうものを樹下に見ることができます。また、開花しても結実しないで落下するものも多く、さらに結実後も6月になると肥大することなく落下するものも多く見られます。無駄な資源投資と思われるこの現象は、果樹などにも多いのですが、種子を食害された果実の除外などその方が都合の良い理由があるのかもしれない。

落ちているものにも目を向けてみましょう。